

多発性骨髄腫に対する同種造血幹細胞移植；単一施設9例の検討

近藤忠一、石川隆之、一戸辰夫、高折晃史、門脇則光、堀利行、内山卓

京都大学医学研究科血液・腫瘍内科学

[目的] 多発性骨髄腫に対する同種造血幹細胞移植が、自家移植に勝る有用性があるか疑問がもたれている。自験例をもとにその効果を検討した。[方法] 対象は2001年3月より2004年11月までに当科で同種造血幹細胞移植を行った多発性骨髄腫9例(IgG 6, IgA 1, BJ 2)。移植時年齢は35-65歳(中央値51歳) 全例自家移植の既往を有し、同種移植時の病状は免疫電気泳動(IEP)上M蛋白陰性が3例、少量のM蛋白残存が3例、明らかな再燃後が3例。ドナーはHLA一致同胞7名、HLA一致非血縁者2名、幹細胞源は骨髄4名、動員末梢血5名。移植前処置はフルダラビン+ブスルファン+低線量TBI 7例、フルダラビン+ブスルファン 1例、フルダラビン+メルファラン 1例。GVHD予防はFK506/MTXを基本とし、非血縁移植ではMMFを追加した。[結果] 再燃例全例で移植後PR以上の治療効果を認め、少量のM蛋白を認めた3例中2例でIEP陰性となった。再燃後の同種移植を除く6例はgrade2以上の急性GVHDを4例に、慢性GVHDを全例に認めたが、観察期間9-53ヶ月(中央値24ヶ月)で全例無増悪生存中である。再燃後の同種移植3例においては、1例移植後4ヶ月でウイルス感染症により死亡したほか、残る2例も移植後1年以内に再発した。[結論] 同種造血幹細胞移植を自家移植後の寛解期に行うことで、少なくとも2年程度の無再燃生存が期待できる。一方、自家移植後の再燃期の同種移植は化学療法感受性であっても合併症と再発の危険が高い。